

軸足の置き場

静岡県立大学国際関係学部国際言語文化学科

教授 諏訪 一幸

2つの大学で政治問題を中心に現代中国に関する講義を行っているが、前期授業もどうにか終わり、ほっと一息ついた。

それから一週間ほど後、この半年間の出来事をつらつら振り返っていると、2つの大学の学生から受けた質問の中に、一つの共通事例があったことを思い出した。「先生は中国共産党が嫌いなのですか?」、「台湾に関する話を聞いていると、先生は国民党嫌いのようにも思えるのですが」。問われたときは、正直戸惑った。と言うのも、私は好き嫌いで中国を語ることを極力避けてきたつもりでいたからだ。

そこで自問した。私は講義で、中国を論じる際の判断基準を学生に示すことができたのだろうか。自らの軸足の置き場は一体どこにあるのだろうか、と。

地域研究者に求められているのは、グローバル化の進展を不件に(この問題をめぐる賛否の議論は暫し棚上げし)、研究対象国・地域のありのままの姿を描き出すことによって、わが国の国益を確保し、国際場裏で更なる貢献を行うための道程を示すということに他ならない。そのため、私は中国の、「私が認識するところの真実」を学生に伝え、彼らの間に対中理解の基礎を築くことに最大の力点を置いてきた。それは時として批判的なものとなった。こうしたスタンス、つまり軸足の置き方が、学生の目には「共産党嫌い」や「国民党嫌い」として映ったのであろう。

中国の「真実」とは何か。私は彼の国の政治制度の一端を明らかにしようと、共産党が武力で学生らを鎮圧した「6・4」天安門事件について述べた。事件を扱ったドキュメンタリー映画を上映し、事件の最中に私が現場で撮影した写真を見せたりもした。学生の多くがショックを受けたようだった。強固な一党体制を構築し、それを是が非でも守り抜くことを選んだ共産党の存在抜きに中国は語れない。さらに、歴史を知り、そこから教訓を汲みとることの重要性を指摘した。国民党が台湾に入った直後に起こった「2・28事件」は、映画「悲情城市」でも描かれた、「省籍矛盾」の原点である。「政治的自由」を謳歌する現在の台湾からは想像がつかない出来事だとの声が学生からあがった。事件から60年以上経った今でも台湾の人々の心の奥底に残る「2・28」の傷跡が、対中関係改善を進める馬英九政権の足かせになっている。

確固たる軸足の設定は、自らの立場を明らかにし、強化する。

7月末、わが国の中国駐在大使としては初めて、民間から登用された丹羽宇一郎大使(元伊藤忠社長)が北京に着任した。経済的つながりをますます強める日中両国である。官僚出身者にはないしなやかな発想で、関係強化に全力を尽くして欲しいところだ。ところが、氏は赴任直前、「(中国の軍事力拡大は)大国としては当然といえば当然のことかも知れない」と述べ、着任当日には「愛国・親中の精神で頑張る」と意気込みを表明したという。いずれも理解に苦しむ発言である。なぜなら、20年にわたる中国の軍事力拡大政策は軍縮を進める現下の国際情勢に背反するものであり、しかも、軍事的透明性の低い隣国の存在は何と言っても丌安の種だからだ。また、「愛国」にせよ「親中」にせよ、近年の日中関係は、この言葉自体が少なからぬトラブルのもとになってきたことを明らかにしている。大使の発言は誤ったメッセージとなりかねないのである。したたかな外交を展開する中国に足元をすくわれるおそれもある。

新大使には、まずは上記の発言にうかがわれる評論家的スタンスを軌道修正のうえ、自らの軸足の置き場或いは立ち位置を常に斟酌しつつ、職務を全うされることを切に願う。